慶應義塾 醫学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

三四会ホームページ

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時　午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

2021慶應連合三田会大会報告

「みんなでみらいへ」コロナ禍での連合三田会大会開催

昨年中止となった連合三田会が10月17日、2年ぶりに開催されました。いまだコロナ禍にあり、「初のデジタルオンライン開催」という苦渋の決断を余儀なくされました。オンラインで人が集まるのか、如何にオンライン企画を組むのか、そしてチケットが売れるのか、問題は山積していました。しかし実行委員会を中心に様々な取り組みが行われました。まずデジ三田アプリを開発し、誰でも世界中から参加できる環境を作りました。記念品や福引景品をより魅力的なものとしました。模擬店の代わりに各店舗の動画をデジ三田上で配信。各学部、各地三田会紹介動画、バーチャルキャンパスツアーなどが企画され飽きさせないコンテンツが目白押しでした。

医学部も、北川前病院長と阿川佐和子さんの対談をはじめ、齊藤淳一先生（72回）、竹下啓先生（72回）が中心となり、さまざまな医学部セミナーが配信されました。当日ライブ配信されたメインプログラムは2つ。卒後50周年を迎えたOBOGの記念式典。もう一つは「あれから10年、これからの10年　絆を未来へ」と銘打った特別企画でした。ゲストに櫻井翔さん、岩田剛典さん、廣瀬俊郎さんら、また各局の有名アナウンサーが集結。普段テレビでは共演するはずのない豪華メンバーでした。当日視聴された方々から、まるでテレビの特別番組を見ているようだった、とのご感想をいただき、慶應社中の実行力に敬意を表すばかりです。

さて例年医学部は、日吉に赴き救護部会として救急対応をしています。しかし今年我々の活動は、メインプログラム参加者のみを対象とした限られるものとなりました。一方でプログラム企画段階から、「絶対にクラスターは発生させない」ことを目標に、コロナ感染予防につき実行委員会と会議を重ね、以下の対策を実施することとなりました。神奈川県大規模イベント開催ガイドラインに準ずる。記念館入り口に非接触型体温計を設置する。参加者には予めコロナワクチン接種を終えることと不織布マスク着用の周知。現地スタッフにもワクチン接種終了またはPCR検査、抗原検査を求める。これらの検査料金は三田会側で負担。記念式典の座席は1m以上間隔を開けて配置、適宜消毒を行う。など徹底したものになりました。

2年ぶりに現地に集まったのは医師12名（70回生10名、80回生2名）、看護師8名、計20名。白衣、ガウン（実行委員会、吉村雅隆さんよりご寄付）を着用し、会場入り口、会場内に待機。救護部会本部は例年と異なり、日吉記念館内に設置されたため、体温計、車椅子、パルスオキシメーターなどの機材を保健管理センターより借用いたしました。保健管理センター所長、森正明先生には多大なるご協力をいただき感謝申し上げます。

当日救護部会で対応したのは、転倒による骨折（済生会横浜市東部病院に迅速にご対応いただきまして感謝申し上げます）1名、一過性低血圧による体調不良（記念式典で塾旗旗手を務めていた応援指導部学生さん。すぐに回復）1名、の計2名のみでした。おかげ様で発熱対応はゼロ。現時点で関係者のコロナ感染の報告はありません。皆様のご協力に心より感謝申し上げる次第です。

初のデジ三田は、現地に来なくても参加できるメリットが十分に生かされ、チケット販売総数は目標の113・5%。医学部・看護短期大学においては241・3%に達しました。三四会の先生方には重ねて御礼申し上げます。来年以降もオンラインと現地の、正にいいとこどりハイブリッド開催が模索されるのではないかと思います。より参加しやすくなった慶應連合三田会大会。是非来年もご参加くださいますようお願い申し上げます。

（救護部会長　原　晃一　70回）

救護部会メンバー集合

会場入口で待機する救護部会

記念式典で挨拶される菅沼連合三田会会長

医学部イベント

「コロナと闘う！慶應義塾大学病院」

コロナ禍の中、慶應義塾大学病院・医学部の状況・社会に果たした役割を、塾員・塾生に広く知っていただくため、今年は、医学部・連合三田会合同企画として、特別講演「コロナと闘う！慶應義塾大学病院」を事前収録し、連合三田会大会でWEB配信いたしました。

2020年という開院100周年の記念すべき年に、新型コロナウイルスパンデミックという未曽有の危機に直面した慶應義塾大学病院。最前線で陣頭指揮を執られた北川雄光常任理事（前慶應義塾大学病院長）に阿川佐和子さん（作家・エッセイスト）がインタビューする対談形式の講演です。

講演内容は、感染拡大初期に起こった院内感染と研修医クラスター問題とその対応、即座な入院前PCR検査の導入による院内感染防止対策の構築、基礎・臨床が文字どおり一体となった新型コロナウイルスの研究における取り組み（慶應ドンネルプロジェクト）、医療従事者へのメンタル面でのケア、感染爆発に備えた診療体制の整備など、コロナ加療・対策を行いながらも一般診療を行う難しさと、現場でしかわからないリアルな状況に加え、慶應義塾大学病院・医学部ならでの取り組みを伺いました。

講演内では、コロナ禍において、慶應義塾大学病院にご支援いただいた、慶應社中の方々への感謝・御礼が述べられ、また、慶應義塾大学病院の今後の展望の中で、AIホスピタルへの取り組みについても語られました。北川前病院長の人物像にも迫る、たいへん見ごたえのある講演会となりました。

（稲城市立病院外科　齋藤淳一　72回）

第16回慶應赤倉アカデミーKAA

「キャリア」をテーマにオンライン開催

三四会赤倉山荘担当理事　深川　和己（68回）

2006年に始まった慶應赤倉アカデミーKAAは昨年までは三四会の事業として開催されていましたが、2021年4月に正式に慶應義塾の公認団体となり、本年からはKAAが主幸、三四会が後援する形となりました。COVID-19感染抑制の観点から、昨年に続き本年もオンライン開催となりましたが、KAAの学生委員たちは素晴らしいKAAを作り上げました。

病院薬剤学教室教授の大谷壽一先生、株式会社CureApp CEOの佐竹晃太先生、ケアプロ株式会社CEOの川添高志先生、公衆衛生学教室教授の武林亨先生から素晴らしい講演をいただきました。いろいろな資格や経験が将来の自分の人生につながること、「他流試合」の大切さ、社会に本当に役に立つことのためのチャレンジの大切さなど、医療系3学部の学生たちのこれからのキャリア形成にとって刺激的なメッセージを多くいただきました。学生たちの感動をオンラインの画面を通じても感じることができました。

医学教育統轄センター　門川　俊明（70回）

慶應赤倉アカデミーは、慶應赤倉山荘に行って、素晴らしい講演を聞いて、学生と講師が夜を徹して語り合うという趣旨のプログラムである。当初は医学部の学生だけが参加していましたが、その後、看護医療学部、薬学部の学生も加わることで、三四会の支援のもと、医療系学部の課外活動となり、2年前からは公認団体として活動している。

2021年の慶應赤倉アカデミーは、昨年に引き続き、オンライン開催となった。医学部、看護医療学部、薬学部の40人の学生が集まり、「キャリア」をテーマに、株式会社CureApp佐竹晃太先生、病院薬剤学大谷壽一教授、ケアプロ株式会社川添高志先生、公衆衛生学武林亨教授に講演をいただいた。なかなか、赤倉山荘に出かけられない中、学生達がしっかりと慶應赤倉アカデミーの伝統を引き継いでくれている。

【講師より】「他流試合のすすめ」

株式会社CureApp代表取締役CEO／本赤十字社医療センター呼吸器内科　佐竹　晃太（86回）

私は医師としての道を進んでいる中で、中国・米国へと留学をしました。そこで出会った1つの論文がきっかけで、7年前に株式会社CureAppを起業し、現在は「治療用アプリ」の研究・開発をしています。呼吸器内科が専門ということもあり、最初に慶應義塾大学医学部と共同でニコチン依存症治療アプリの開発を行いました。既に治験での有効性を証明し、禁煙領域では世界で初の治療用アプリの薬事承認取得、保険適用による処方が開始されています。医薬品、ハードウェア医療機器に次ぐ第3の治療法（デジタル療法）として、日本でも治療用アプリによる治療がファーストチョイスになる日を目指し、様々な疾患に対して開発を行っています。

今回医師をしながら起業するということについて、「他流試合のすすめ」というお話をさせていただきましたが、学生の皆さんも、今までとは全く違う環境に自分の身をおき、新しい体験を通じて、自分を磨いていってもらえればと思います。

「KAAに参加して」

公衆衛生学教室教授　武林　亨

病院の外で活動するというキャリアをつくっていく話を訊きたいとのリクエストをいただき、「パブリックヘルス（教育研究）というキャリアの一例」と題して話題を提供した。

高橋謙先生（23回）から薫陶を受けた産業医の現場での学び、そしてMPH取得のために在籍したハーバード公衆衛生大学院で受けた学び・教えることへの刺激が、公衆衛生の専門家として生きていく自分の礎となったことからスタートし、その後、いろいろな縁を得て、研究、社会活動、教育へと展開していった様子を伝えたところ、終了後、「地域それぞれの特徴に合わせた対策を考えていくことが魅力的でした！公衆衛生に関わってみたいと思いました」、「根本にあるのは学び、探求し続ける力だと感じました。医療の分野だけではなく他のことにも興味を持って学んでいきたいです」といったメッセージをいただいた。しっかりと受け止めて下さった参加者の皆さんにあらためて感謝する次第である。

「赤倉アカデミーに参加して」

病院薬剤学教室教授　大谷　壽一

ありがたいことに、KAAで3年ぶり、2度目の発表の機会をいただきました。通常、セミナーなどに招聘されると、自分が行っている教育、研究が発表テーマになるのですが、そこから外れたテーマで発表させていただけるのが、KAAの醍醐味です。

前回はファイナンシャルプランニングの話でしたが、今回のお題は「医看薬系のキャリアパスを考える」としました。参加者の多くは、それぞれの学部で医療資格の取得を目指して日夜勉強に勤しんでいる学生のみなさんです。そこで、「資格とは何か」「キャリアにおける資格の位置付け」「資格があれば安泰か」など、あらためて考えていただければと思い、私のキャリアや経験を交えつつ、雑駁なお話をさせていただきました。さらに、今年は対面での発表は叶いませんでしたが、KAA委員のみなさんのご尽力で、リモート形式ながらも参加者のみなさんと交流する機会も作っていただき、大変楽しい会となりました。

「看護×起業」

ケアプロ株式会社　川添高志先生

高校時代に看護師で起業を志し、2001年に看護医療学部一期生として入学し、25歳で起業してから今までのことを講演しました。看護の起業分野は多様で、予防医療や在宅医療、スポーツ医療など、社会的課題が大きく、事業機会が多く、規制やビジネスモデルの困難さはありながらも、先導するやり甲斐があります。

KAAに参加している看護医療学部生の大野君や高堀君、佐村君は、弊社でインターンやアルバイトをしており、悩みながらもキャリアを歩んでいることを知っています。私も、悶々とした日々がありましたが、実習や臨床で患者さんが困っていることを解決していくために、自分なりの方法を考える中で、自然と道は見えていきました。

赤倉山荘で、どんな山を登ろうか悩んでいる若者よ、有名な山を目指すのではなく、これからの社会で必要となる山を見極めて、その山を切り拓け！

【学生より】代表挨拶

医学部6年　島津　優輝

コロナ禍でチームとして活動する頻度が激減した私にとって、チームで成功をおさめる達成感の素晴らしさを再認識させてくれる経験になりました。3学部が交流を深め、チームを作り、目標を達成し、さらに交流を深めるという好循環がKAAを通して受け継がれていってほしいと切に願います。

最後に、今回の講演会に尽力してくださいました講師の先生方、顧問の先生方と学生委員で一丸となり準備を進めることで、交流を深め、1人1人にとって実りのある会を実現できたと感じています。

人と人との交流が減ってしまいがちなこの時代に、OB・OGの先生方および3学部の学生の交流の活発化を目標とするKAAの仕事はやりがいのあるものでした。オンラインという便利ですが希薄な環境で、今の学生は何の話を聞きたいのか？どのような企画なら交流を深められるのか？など、根本的な課題により一層深く取り組む必要がありました。困難なこともありましたが、顧問の先生方と学生委員で一丸となり準備を進めることで、交流を深め、1人1人にとって実りのある会を実現できたと感じています。

第125回生涯教育研修セミナー

「疼痛診療の進歩」

麻酔学教室教授　森﨑　浩（62回）

小杉志都子准教授

成田年教授

森﨑浩教授

藤澤大介准教授

秋晴れの2021年10月23日土曜午後、第125回医学部生涯教育研修セミナーが開催されました。幸いにもコロナ禍が全国的に落ち着き始め、長期に及んだ緊急事態宣言も先月9月末に解除された後となりましたが、準備段階より予定された通り完全WEB形式での開催となりました。本セミナーのテーマは『疼痛診療の進歩』と致しました。痛みは主観的な感覚であるうえに、身体的のみならず心理社会的要因などが複雑に関与するため、慢性化に至る科学的な病態解明や適切な対処法が他の診療領域に比べ遅滞してきた経緯があることは否定できません。一方、我が国においては2000万人以上もの方が慢性疼痛に苦しまれているとも言われており、高齢者のみならず、働く世代においても就労制限や作業効率の低下など社会的な損失にも繋がっています。今回は最新の臨床的・基礎的アプローチにより疼痛診療をどこまで改善できてきたかを皆様に紹介することを主眼と致しました。実はこの課題は2年程前に大型台風19号の首都圏接近に伴い、鉄道各社が計画運休を実施、急遽中止させて頂いたテーマでもあります。

本セミナーでは3名の方々にご講演をお願い致しました。はじめに当大学病院痛み診療センター長、麻酔学准教授の小杉志都子先生より「慢性疼痛に対する学際的痛み診療Up to date」という課題で講演頂きました。当大学病院では新病院棟の竣工なった2018年6月より全国でも数少ない集学的痛み診療センターを整形外科、精神神経科、リハビリテーション科と共に開設し、以来受診患者数が顕著に増加するなど想定以上に社会的需要がある点に加え、多職種による学際的な疼痛治療が痛みを無くすのではなく、痛みと共に日常生活を出来ることを治療ゴールとする点で相応の成果を上げていることが紹介されました。

2人目の講演者として、星薬科大学薬理学教室教授であると共に現在国立がん研究センター研究所がん患者病態生理研究分野分野長も務められている成田年教授に「痛みやストレスの制御がもたらす生体内免疫機構に対する影響：痛みストレス病態センシングの解析」という課題でご講演を頂きました。成田教授は我が国を代表する痛み研究の第一人者であり、国がんの研究分野長兼務という激務の中でしたが、疼痛が液性因子を介して脳内の炎症反応を惹起し、生体の免疫機構にも及ぼす影響についてわかりやすくご講演頂きました。がん性疼痛の克服に向け大いに期待の持てる病態解明が確実に進んでいることが紹介されました。

そして本セミナーの最後の講演者として、当大学病院医療安全管理部副部長ならびに医学部准教授である藤澤大介先生に「慢性痛に対するマインドフルネス認知療法」という課題でお話しを頂きました。昨今、良く耳にするマインドフルネス認知療法とは、体験や心の状態に気づき、それを受け入れる態度を育てる治療法であり、既に数多くの企業の厚生プログラムとして取り入れられているとのことです。ご講演の中では、聴講者がそれを実践体験するなど、慢性疼痛に悩む患者さんのみならず、ストレスの多い社会に生きる我々にとって、痛みを含むストレスに支配されない「心のゆとり」を持つ対処法が、今後、益々重要となる点をご紹介頂きました。

今回は約200名の方々に事前予約頂いた上で数多くの皆様に聴講頂きましたこと、この場をお借りして御礼申し上げますと共に、数多くの人々を悩ます慢性疼痛の診療が更に進歩し、いつの日か人類が慢性疼痛から解放される日が到来することを祈念しているところです。最後に、本セミナー開催にあたり、大正製薬株式会社をはじめご支援を賜わりました関係者の皆様、そして本セミナー準備に腐心頂きましたセミナー委員会ならびに事務局の皆様に心より感謝申し上げます。

慶應義塾大学病院・三四会・慶應医学会
100年合同記念式典・シンポジウム　アーカイブ視聴

2021年９月11日（土）に開催された、慶應義塾大学病院・三四会・慶應医学会 100年合同記念式典・シンポジウムについて、ライブ配信された当日の動画をアーカイブ化しました。
以下対象の方で、アーカイブ動画の視聴をご希望の方は、QRコードもしくはURLよりお申し込みください。後日、事務局より視聴方法についてご連絡します。

対象者：慶應義塾教職員、三四会会員、慶應医学会会員、塾生（一貫教育校生を含む）、近隣医師会会員、その他慶應義塾関係者
※対象者のご家族の参加も可能です

アーカイブ視聴申込フォーム
：https://forms.gle/w2PxF4yCAPVDN88j9

鑑賞知来

昨年、新型コロナの感染が広がりはじめてから改めて読み直した本に『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ―人類とウイルスの第一次世界大戦』（藤原書店）がある。474頁に及ぶ本の著者は、塾の経済学部で経済史を教えていた名誉教授速水融（はやみ・あきら）氏である。

速水さんは、歴史人口学を切り拓いた人であり、歴史研究に史料の統計的分析を取り入れるという従来なかった方法を確立した人でもある。国内外で高く評価され、文化勲章も受章している。

速水さんは鉄道マニアで、小学生時代の愛読書は列車時刻表。その趣味が研究にも生きてくる。日本の各地には徳川時代の「宗門改帳」が残っている。元々は、幕府のキリスト教取り締まりの為のものであるが、各村では、村人の家族構成、年齢、檀那寺などを定期的に調査し記録していた。速水さんは、列車の時刻表にヒントを得て、家庭と個人の動きが時系列で把握できる記録方法を考案。各地の人口動態を明らかにするだけでなく、その時代の人々の生き方を統計資料から活き活きと示す研究を展開した。

その速水さんが76歳の時に出版したのが冒頭の本である。新型インフルエンザの脅威が言われているのに、約百年前の新型インフルエンザである「スペイン風邪」の研究が日本には殆ど無いことに疑問を抱く。人口動態資料と当時の新聞記事等を整理し、超過死亡者数を45万人と推計すると共に、3波あったこと、地域差、クラスター発生の状況等を明かにしたのであった。

速水さんは、2019年12月、90歳で逝去した。新型コロナで右往左往する状況を予想したかのような速水さんの研究は、歴史家ならではの警鐘でもあった。

今日、文理融合の研究の必要が問われている。まずは、速水さんの著作に触れることからはじめてみてはどうか。一見医学から縁遠い歴史研究から、多くの示唆が得られることに気付くであろう。

（慶應義塾常任理事　山内慶太　70回）